



柘植 あづみ教授 (専攻 医療人類学)



(1) 社会学とはどのような学問とお考えですか。

私は理学部を卒業して実験系の仕事に就きましたが、その後、生命倫理(バイオエシックス)を知り、さらに科学社会学や医療人類学といった学問と出会い「こんなおもしろい学問もあるんだ」と感激し、30歳を目前にして専攻を変えました。それ以降、自分が疑問に思う社会現象について調査し、考えてきました。困るのが「ご専門は何ですか」と尋ねられるときです。どんな研究テーマで、どんな研究方法を用いて研究しているかなら、興味をもってもらえるように説明できますが、どんな学問領域にもまたがり、でも主流ではない研究なのです。そこで受け入れて、研究発表のチャンスをくれたのが社会学だったのです。ですので「社会学とは何か」という問いには、なんでもありの学問と答えたいです。

私なりの理解では、そこで生活している人たちが「当たり前」だと思っている常識を疑い、なぜ、それが常識になったのか、それが常識になった結果どのような社会が存立しているのかを考えていく学問だと思います。そして、その社会の「常識」によって権利が侵害されたり、その社会を窮屈だと感じていたりする人の声を聴き、権利擁護に少しでも貢献しようとしている学問だと思っています。

(2) 先生が専攻されている、あるいは、この大学で学生に教えられている社会学とはどのような学問ですか。

私の専攻は、あえていうなら医療人類学という学問領域です。これは、医学／医療や生命科学技術を、その背景にある文化・社会の中（文脈）に置いて、その意味・意義・問題点を考える学問です。

現在の関心は、体外受精や人工授精などの不妊治療、胎児検査や遺伝子検査、クローンを含む再生医療、治療が難しいとされている病気／障害、生活習慣病など、その患者と家族がどのように病気に苦しみ、いかに対処しているか、一方、医療者は病気にどう対処しようとし、患者とその家族にどう対応しているかです。そこから、どうして医療や生命科学技術が進展するのかを、それぞれの当事者にインタビューして、そこから「社会」や「文化」について考えています。

担当講義は開発と健康の社会学、医療と身体的人类学です。これらの講義の鍵となる概念のひとつが「医療化」です。「医療化」とは、それまで医療の対象にはなっていなかった人間や社会のある状態を医療の対象としていくことです。たとえば、出産や老化など、過去には日常的に対処されていた事柄が、医療の対象になりました。そのことが、社会にいかなる変容をもたらし、そこに生きる人たちの考え方や関係性をいかにどん変えたのかを検討していきます。そこから、人間が生まれて成長し、病気や障害をもったり、妊娠・出産、不妊、避妊や中絶などのリプロダクション、年をとることを、実際の現象を観察し、話を聞いて、社会・文化を見る力を養うことを目的にしています。

(3) 1～2年次で読んで欲しい本

人がいかに生まれて成長して、老いて、亡くなっていくのかを理解するためには、多くの人生、多様な生き方を知っておいて欲しい。1～2年生のうちにこれまでの思い込みが音をたてて壊れていくような本に出会うと同時に、社会経験をもしてほしい。小説や漫画でもいいのでいろいろ読んでください。

- 1.『試験管の中の女』(リタ・アルディッティ他編 共同通信社 1986) 1986)フェミニストの視点からの生殖技術批判の先駆け。当時、画期的だったのは、「先進国」の女と「開発途上国」の女の双方の視点を技術批判に取り入れようとした点。出版されて時間が経っているが、新しい視点、考え方を得られる。
- 2.『いのちを選ぶ社会 出生前診断のいま』(坂井律子 NHK出版 2013) 胎児の段階で染色体や遺伝子、発達状況などを検査して、胎児の疾患や障がいがあるいま、社会がいのちを選んでいるのではないか、という問いかけをする。検査の結果を受けて中絶するかどうかを孤独に悩む女性をテーマにした小説『誰も知らないわたしたちのこと』(シモーナ スパラコ 紀伊國屋書 2013)もお奨め。
- 3.『ウェクスラー家の選択』(アリス・ウェクスラー 新潮社 2003) 中年期以降に発症するとされる治療できないとされている遺伝病のハンチントン病によって母を介護し、病気の治療を実現するために家族が努力し、その結果、遺伝子検査が可能になったが、著者と妹は検査を受けるか否か悩む。いまはさらに多くの遺伝性疾患や症状の遺伝子検査が可能になっている。私たちが望む医療とは何か、社会とは何かを考えるきっかけにして欲しい。
- 4.『わたしを離さないで』(カズオ・イシグロ ハヤカワ文庫 2008) ノーベル文学賞を受賞した著者が、臓器移植、クローンを扱って、サスペンス仕立てのディストピア小説のようである。「私」として存在するとはどういうことか、を考えさせられる。似た内容の漫画に「輝夜姫」(清水玲子 白泉社)があるが、イシグロの小説と違って、漫画の方は登場人物が運命に怒り、闘うのが興味深い。

5.『夜と霧—ドイツ強制収容所の体験記録』(V・E・フランク みすず書房 1961) ナチス・ドイツの強制収容所を体験した精神医学者の著書。死と向きあわざるを得ない状況下での著者の冷静な観察眼に驚嘆する。もちろん『アンネの日記』(アンネ・フランク 文春文庫他)もどうぞ。

6.『ジェンダーは科学を変える? 医学・霊長類学から物理学・数学まで』(ロンダ・シービンガ 工作舎 2002) 男女差の生物学的決定論を「科学的」証拠をあげながら崩していく。「なぜ、女は数学や自然科学に向かないのか」などという問いかけの愚かさがわかる。思わず声をあげて笑ってしまう。同様に『セックス／ジェンダー—性分化をとらえ直す』(アン ファウスト-スターリング 世織書房 2018)は現代科学のジェンダー・バイアスを暴く。

7.『からだ 私たち自身』(ポストン女の本集団 松香堂 1988) 女性には、一人一冊もっていて欲しい女性のからだところについての事典。自分のからだに向きあう姿勢が良い。英語版は改訂を重ねて、新しい情報も加わっているが、残念ながら翻訳版は品切れ、各自治体の女性センター(男女共同参画センターなど)の図書室には置いてあるはずです。

8.『へんな子じゃないもん』(ノーマ・フィールド みすず書房 2006) 日本人の母と米国軍人の父との間に東京に生まれ、アメリカで日本近代文学を教える著者は敗戦後の日本で一緒に暮らした祖母に死期が迫ったときにずっと気になっていたことを問いかける。同じ著者の『天皇の逝く国で』(ノーマ・フィールド みすず書房 1994)もお奨め。昭和天皇がながい病床に伏せたとき、沖縄国体で日の丸を焼き払った事件の当事者、殉職自衛隊員の夫の護国神社合祀に反対したキリスト者の妻、昭和天皇に戦争責任はあると発言して狙撃された元長崎市長を尋ね、彼らのように「こだわり」を表明する人々を排除してきた日本人の心性に迫る。どちらも大島かおり翻訳の日本語が美しい。

(4) 3～4年次で読んで欲しい本

1.『新版 隠喩としての病い／エイズとその隠喩』(スーザン・ソントグ
みすず書房 1992) 病いがもたらす身体的な症状ではなく、その隠
喩の影響について鋭く指摘した書。「病気」を文化的・社会的文脈か
らみることの重要性がわかる。

2.『日本人の病気観～象徴人類学的考察』(大貫恵美子 岩波書
店 1985) 日本に育ちアメリカで学者になった著者が、日本人の「病
気」に対する観念を分析した本。日本人の意識や行動を理解した上
で、文化相対主義の立場から分析する姿勢に学ぶところは多い。

3.『助産婦の戦後』(大林道子 劉草書房 1989) 助産婦という職
業は、社会によってずいぶん位置付けが異なる。日本では、助産婦
は女性の職業人として尊敬されてもきた。戦後の助産婦の地位はど
のように変化したか、自宅分娩が多かった日本のお産が、なぜ、急激
に施設分娩に変化したのかを明らかにしていく。『お産と出会う』(吉
村典子 劉草書房 1985)や『子どもを産む』(吉村典子 岩波新書
1992)も必読。

4.『日本人の死のかたち 伝統儀礼から靖国まで』(波平恵美子
2004 朝日選書)『ケガレの構造』(波平恵美子 1984 青土社)
日本人のケガレ観を、各地の葬送儀礼や病気、出産などをフィール
ドワークしてまとめた書。著者の鋭い分析は、文化・社会を観る際
に、大いに参考になる。同じ著者の『いのちの文化人類学』(新潮選
書 1996)は読みやすく、こちらから読み始めてもいい。他に『病気と
治療の文化人類学』(海鳴社 1984)も興味深い。

5.『妊娠—あなたの妊娠と出生前検査の経験をおしえてください』(柘
植あづみ・菅野摂子・石黒真里著 2009 洛北出版) 妊娠中の検
査で胎児のいろいろな状態がわかるこの時代に、妊娠するとはどんな
経験なのか。なぜ、自分は産むとか産まないという選択をしたのか。そ
の経験を振り返って、いま、なにを思うのか。そして、もしも胎児に障

害があることがわかったら、どうしたのか。これは妊娠や出産を経験した375人の女性への詳しいアンケート調査と26人へのインタビュー調査結果をまとめた分厚い本。待ち望んでいて妊娠・出産した経験だけではなく、妊娠がわかったときに産むか産まないのかを真剣に迷った経験、流産や死産の経験、そして出生前検査によって胎児に障害があることがわかって悩んだ経験など、さまざまな妊娠をめぐる女性たちの声を丁寧に描いた。もしも胎児に障害があることがわかったら。その障害が出産後の手術などが可能なきときとそうではないとき、障害のある子どもを産んで育てることを夫や医師がサポートしてくれるときとそうではないとき、自分ならどうするだろう、自分はなぜそうしたのか、そんな自問を続ける女性たちが、いまを生きるために語ったデータが詰まっている

(5) 先生の代表的な著書または論文を二つか三つ教えてください。

1. 『生殖技術—不妊治療と再生医療は社会に何をもたらすか』
(柘植あづみ 2012 みすず書房) 先端医療技術をもたらすのは「病気」や「障害」の解決手段としての「治療」だと考えられている。しかし「治療」をもたらすために不妊治療は精子や卵子の第三者からの提供、代理出産へと展開し、年をとって子どもができなくなることも「治す」対象にした。再生医療は「治す」ことに焦点をあてるあまりに、再生医療が進んでも治せない病気や障害は数多くあること、病気や障害があっても人間らしく、自分らしく生きることを治すことよりも尊重してほしいと話す人たちの存在を見えなくしていないか。生殖技術を多角的な視点から捉えて、人間とは何か、医療とは何か、そして社会とは何かの問題を提起した本。
2. 『文科省／高校「妊活」教材の嘘』(西山千恵子・柘植あづみ編著、論創社 2017) 2015年8月、文科省は少子化対策

を盛り込んだ高校保健体育の教材『健康な生活を送るために』を発行したが、そのなかの「妊娠のしやすさと年齢」グラフは「妊娠しやすさのピークは 22 歳」に改ざんされたものだった。調べていくと、『健康な生活を送るために』のうち 4 ページが内閣府少子化担当が作成したもので、その内容は高校生に、できるだけ早いうちに結婚して子どもをもつことを推奨していた。さらに、そこで示されたデータや記述には明らかな間違いや疑問のあるものが少なくなかった。これに危惧を抱いた研究者・大学教員がその問題点を指摘し、現代のデータや歴史を丁寧に示して「嘘」を暴いた問題提起の書。

3. 柘植あづみ「女性の健康政策の 20 年—リプロダクティブ・ヘルス/ライツから出生促進政策まで」『国際ジェンダー学会誌』14 号, pp.32-52 1990 年代に世界的にリプロダクティブ・ヘルス/ライツという概念が提唱され、子どもを産むことについての最終的な決定権は女性の人権のひとつであるとされた。日本政府もそれを尊重する形で政策に盛り込んできた。ところが 2000 年代になって、それまでの子育て支援が中心だった少子化対策は、個々人の性と生殖に干渉するようになり、不妊治療の奨励、若いうちの結婚と出産を奨励を始めた。2010 年代にはとうとう中学・高校教育までが少子化対策の対象にされた。「少子化対策」20 年間の経緯を読み解いた論文。